

研究課題 (テーマ)		ユマニチュードのケア技法を取り入れた体位変換技術教育プログラムの検討		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部 基礎看護学講座	助手	細田 恵莉奈	
分担者	看護学部 基礎看護学講座	講師	山本 麻理奈	
	看護学部 基礎看護学講座	助教	矢野 正晃	
	看護学部 基礎看護学講座	教授	岡本 恵里	
研究結果の概要				
<p>【背景】長時間の同一体位は褥瘡の発生や苦痛を伴うため、体位変換技術により安楽になるよう努めている。しかし今日の看護現場では、当事者の意思に沿うのではなく、時間毎に規則的に体位を変換している場面もある。そこで注目したのは、対象者との知覚・感情・言語による包括的コミュニケーションに基づいたケア技法であるユマニチュード®である。このケア技法は、人間を客観的にみるだけではなく、人々に接近し援助としての関わりを持ちながら、対象者と援助者相互に理解を深めていくものである。</p> <p>【目的】若手看護師の体位変換技術における視線と行動から、ユマニチュードのケア技法である「見る・話す・触れる」がどのように実施されているか行動の特徴を明らかにする。そのうえで、尊厳や安心感を重視したユマニチュードのケア技法を取り入れた体位変換技術を修得するための教育プログラムを検討する。</p> <p>【方法】若手看護師（看護師経験3年未満）に、日常実施している体位変換（仰臥位から側臥位）を、ベッド上の模擬患者に対して2回実施してもらう。看護師には視線計測器（Tobii 製）を装着してもらい、一連の行動をビデオ撮影する。実施後には、体位変換で留意していること等を問う質問紙調査を実施する。実験前に、共同研究者を被験者としたプレテストを行い、実験機材の配置や設定、データ収集の視点を明確にした。</p> <p>【プレテスト結果】<u>対象</u>：研究分担者が被検者と模擬患者となり体位変換を実施した。 <u>ビデオ撮影</u>：看護師の行動を多面的に把握するために、ビデオ撮影は三方向（ベッド頭側・側面・足側）から行うこととし、カメラの設置位置や角度を決めた。<u>視線計測器</u>：体位変換では身体を動かさず動作が多いため、1回目の体位変換後に再度キャリブレーションを行うことで、より正確な視線データを得られることが分かった。また、前髪や横髪が目にかかる視線計測に支障が起これることもわかり、計測器の装着時には、毛髪が動かないよう髪を結ったりピンで留める等、データに影響を与えないよう整えることとした。<u>実験手順</u>：実験をスムーズに進めるため、実験の流れを示したパンフレットを準備することとした。また、視線計測器を装着することによる身体の動かしにくさ等がデータに影響を与えぬよう、測定前に1回のみ体位変換を実施し、自身の身体への装置の影響を確認してもらうこととした。</p> <p>なお本実験は2月頃から開始する計画であったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い見合わせている。</p>				
今後の展開				
<p>新型コロナウイルス感染の拡大に伴う行動制限が緩和した時点以降に、本実験を実施する。研究データの分析を進め、学会発表、論文投稿を目指す。</p>				